

# 公益財団法人 日本骨髄バンク 第47回 業務執行会議 議事録

日 時： 平成29年11月21日（火）17：30～18：15  
場 所： 廣瀬第2ビル 地下会議室  
出 席： 齋藤 英彦（理事長）、小寺 良尚（副理事長）、浅野 史郎（理事）、  
加藤 俊一（同）、金森 平和（同）、鈴木 利治（同）  
高梨 美乃子（同）、高橋 聡（同）谷口 修一（同）、橋本 明子（同）  
欠 席： 伊藤 雅治（副理事長）、佐々木 利和（同）、  
陪 席： 林 久善（厚生労働省 健康局難病対策課移植医療対策推進室）櫻田龍司（同）  
傍 聴 者： 2名  
事 務 局： 松菌 正人（事務局長）、渡邊 善久（総務部長）、大久保 英彦（広報渉外部長）、  
小瀧 美加（移植調整部長 兼 新規事業部長）、五月女 忠雄（ドナーコーディネーター  
部長）、小島 勝（広報渉外部 広報TL）、谷澤 魅帆子（ドナーコーディネーター部  
指導研修TL）、関 由夏（関東地区事務局地区代表）、牧野宜子（移植調整部）、  
澤田彩香（広報渉外部）、鈴木慶太（広報渉外部）、上原 淳（総務部）  
(順不同、敬称略)

## 1. 開会

開会にあたり齋藤理事長が挨拶した。

## 2. 業務執行会議の成立の可否

業務執行会議運営規則第6条により本業務執行会議が成立した。

## 3. 議長選出

業務執行会議運営規則第5条により業務執行会議の議長は理事長が当たることとされており、齋藤理事長が議長に選出された。

## 4. 議事録署名人の選出

議事録を作成するための議事録署名人は業務執行会議運営規則第8条により議長及び出席した副理事長がこれに記名、押印しなければならないとされており、齋藤理事長と小寺副理事長がこれに当たるとされた。

## 5. 議事録確認

前回の業務執行会議の議事録案を全会一致で了承した。

[議 事]

## 6. 協議事項（敬称略）

### (1) SNSによる若年者向けの情報提供について

大久保広報渉外部長が資料に基づき説明した。

現状について、公式SNSとしてFacebookを開設し、イベントや講演会情報を中心に配信している。月に6回から10回くらい更新している。今回の骨髄バンク公式Twitterの開設についてである。骨髄バンク公式Twitterを開設し、継続的な情報提供を実施する。10代から20代の若年者をメインターゲットとして、骨髄バンクに対する理解促進を図るとともに、ドナーへの情報提供の機会を増やすことにより、提供意思の維持を図る。Twitterの利用率、10代では6割以上が利用していると今朝の新聞でも出ていた。概要である。当法人のホームページのトップ画面にTwitter窓口を開設し、広報渉外部の若手職員3名が運用を図る。実施方法である。ツイートする内容は、ドナー登録会開催状況、広報資材の紹介、イベント開催情報、住所変更依頼、登録者数や患者数の現状等を出していきたい。ツイートの頻度については1~2回/日程度、文字数は限られており140字以内を考えている。担当者は広報渉外部の若手の3名である。承認いただけたら来月から開始する。問題点・検討事項についてである。「炎上」トラブルの危険性と対応ということで、Twitterでは情報拡散が容易である一方、利用者の匿名性が高く、予期せぬ「炎上」トラブルが生じる可能性がある。この対応については、アカウント認証による不正利用なりすましの防止や、職員によるツイート内容の確認・管理を徹底、ツイート投稿時の決裁権者の確認をとって、慎重に対応していく。返信のことをリプライというが、個別のリプライは実施しない予定である。表紙の1ページ目に返信は行なわないと注意書きで明記する。質問については公式ホームページで受け付けているのでそちらに誘導する。ツイート使用端末である。現在貸与されているガラケーの携帯電話での対応は困難であるため、対応可能なスマートフォンへ3台切り換える必要がある。

続けて広報渉外部澤田がスライドを使用して説明した。

5つのSNSについて簡単に特徴を説明する。Facebookは実名登録のため信頼性が高く、現実世界の知り合いと繋がるSNSである。30代、40代の利用が多い。当法人も平成26年9月から導入済みである。Twitterは140文字以内の短文投稿メディアで、リアルタイム性が高く、拡散力が非常に高いSNSである。10代、20代の利用が多い。Instagramは画像をコミュニケーションの中心としたSNSである。10代、20代、30代の女性の利用が多い。mixyは2004年からサービス開始して昔流行したSNSで利用者は減っている。LINEはメッセージアプリといって指定の相手と連絡をとる日本で利用者が一番多いSNSである。どうしてTwitterを利用するのかについて説明する。SNSの年代別利用率を見ると20代以下はメッセージアプリであるLINEを除くとTwitterの利用率が一番高い。そのためTwitterを開設する。続いてツイート例である。少し砕けた表現で例文を作った。「今日は●●大学に来ています！だけどまだ登録ゼロ・・・待ってます★」これは登録会の開催情報をツイートしている。先ほどからツイートと申し上げているが、ツイッターにおける書き込み、投稿のことである。写真や動画をつけて投稿することができ、会場の様子も写真で伝えることができる。次の例文「骨髄バンクは今日で26歳！55歳は卒業(+o+)？」意味が分からないかもしれないが、登録可能年齢の情報を含めている。下にホームページのURL等をつけて何歳までが登録できるとか興味ある人に開いていただけるように誘導していきたい。次の例文「3月・・・卒業おめでとう★ドナーさんもお引越してののかな??※住所変更連絡URLを掲載」引越しや移動の時期に合わせて、住所変更を促すツイートとなっている。次の例文「今日はプロスノーボーダーのDAZEさんの講演会にきているよ！」はイベント情報をツイートしている例である。次に「炎上」トラブルの危険性についてである。Twitterは「拡散」が容易である一方、予期せぬ「炎上」トラブルのリスクも極めて高い。炎上とはツイートに対して、非難や誹謗中傷のコメントが殺到して収拾がつかなくなることである。炎上を防ぐ対応として、ツイート投稿時に内容によって決裁権者を定める。登録会のような日頃行なっている業務であれば、担当の職員でツ

イートをする。語りべなどのイベント関連、PR資材関連は部長の確認、プレスリリース等のバンクとしての見解は事務局長の確認を必要とする。ハッシュタグRTとあるのはリツイートの中で、リツイートとは他のユーザーの発言を自分のタイムラインで紹介する機能で、後ほど紹介する。次にリプライへの対応である。基本的に個別のリプライは実施しない。これも炎上しないための対策である。アカウントプロフィール文に、「個別のお返事はできませんが、どうぞお気軽に話しかけてください（^v^）」というように明記する。ハッシュタグの説明をする。ハッシュタグとは投稿内のタグとして使われるハッシュマーク「#（半角のシャープ）」がついたキーワードで、検索すると同じ経験や興味を持つ人の意見が閲覧しやすくなる。ハッシュタグをつけて投稿することによってその発言が何についてのものか手軽に示すことができ、同じ対象に関心がある人を発見しやすくなる特徴がある。例えば、#骨髄バンク、#JMDP などをつけてツイートして下さっている方をこちらからリツイート共有して身近に感じていただきたい。現在ホームページ上では公式YouTube、公式Facebookの案内が画面に出ている。その下に公式Twitterの案内を掲載したい。話題の企業のTwitterを紹介する。パイン株式会社ではプロフィール文に「業務が忙しい時は全てにご返信できないこともあります。お気軽に話しかけてくださいね。」と記載して全員に返信はできないと事前に伝えることで炎上や抽象を回避している。公式アカウントには公式のマークがついている。パイン株式会社の脇に小さく青くチェックマークがついている。これが公式の証になっている。日本赤十字社も公式のページをもっているいろいろなことをあげている。公式ではないが献血バス会場もTwitterをしていて、来てくれた方への感謝などをTwitterしている。ホームページやFacebookがあるのになぜTwitterを開設するのかということ、やはり10代、20代の多くがTwitterを利用して、情報の収集や発信の場としていること、リアルタイム性が高く、短いスパンで私たちの方から発信することで、もっと骨髄バンクや移植のことを若い方に身近に感じてもらうために、Twitterの開設がよいのではないかと考える。

以上の説明の後で意見交換が行われ、全会一致で承認された。

(主な意見)

<加藤> 海外のバンクでは以前から導入しているところもあると思う。その事例から学ぶこともある。そういう情報はあるか。

<大久保> とくに今のところ情報収集はしていない。これを作りながら他の海外の情報も参考にしていきたい。

<金森> 以前にmixiで、医師の知らないところで患者同士が繋がっていて病棟でいろいろな情報が伝わったことがあった。例えばドナーが「提供しました。」とその場で拡散すると、その日のうちに移植されたとすぐにわかってしまう。リスクが非常にあると思う。その辺についてはどう考えているか。

<大久保> コーディネートで情報提供は慎重に行なうように、実名、場所、日時は触れないようにしてくださいと個別にお願いしている。

<金森> 若い人たちは写真を撮って、病棟の患者さんの名前が後ろにぼやけて見えるくらいのを載せてしまったり軽い感覚であるので危惧している。

<鈴木> 3年くらい前からFacebookを使っているが、Facebookの利用でこれまで問題になったことはなかったのか。

<大久保> Facebookでは見ていただいている方が「いいね」を一つのイベントに対して200から500くらいもらっている。それから繋がっている方に、3千人から多いときには2万人くらいに拡散している。それも書き込みができるが、今のところ大きな問題はなかった。

<鈴木> 金森先生が懸念されたことはFacebookでもあり得る話だ。患者が書き込むということはあまりないだろうし、ドナーもコーディネートの段階で説明されているということで懸念されていることがFacebookでは起こっていないのだろう。とすればとくにドナーが提供したことについてアピールしたいという気持ちは分かるけれども、そのことによっていろいろなことが起こるということを、これまで以上にコーディネートの段階で念押ししておいたらよい。

## 7. 報告事項（敬称略）

### (1) プレスリリース（安全情報の発出）について

五月女ドナーコーディネーター部長が資料に基づき説明した。

11月15日に発信したプレスリリースについて報告する。本事例は今年の1月に採取したドナーに関するものである。本年3月に、非血縁者間末梢血幹細胞採取後、発作性心房細動との診断を受け、カテーテルアブレーション治療を施行する予定となった事例が報告され、緊急安全情報を発出した。その後、本年4月に採取施設にてカテーテルアブレーション治療が施行され、外来でフォローアップがなされていたが、9月末をもって治療は終了した。今回の事例について検討した結果、発作性心房細動を発症した原因等について直接的な関係性はないと思われるが、断定することはできなかった。ただし、もともとドナーご自身に素因があった可能性は否定できない。当法人では、各施設に対して情報共有の観点から、「安全情報」を発出した。

（主な意見）

<小寺> これはあらかじめ理事に原案が回っていたのか。それとも事務局で作成したのか。

<五月女> 原案は事務局で作成した。

<小寺> ちょっと気になるのは「ただし、もともとドナーご自身に素因があった可能性は否定できない。」というのは基本的に入れたいほうがいいと思う。

### (2) 骨髄バンク事業に関する研究の協力依頼について

小瀧移植調整部長兼新規事業部長が口頭で報告した。

骨髄バンク事業に関する研究協力依頼への対応ということで2件ある。研究1は千葉大学医学部附属病院からの研究協力依頼で、研究2は骨髄バンクコーディネーター改善のための要因の探索で福田班からである。千葉大学の研究協力依頼について説明する。移植後、患者からドナーへの「お手紙交換」が非血縁者間造血幹細胞移植領域で大きな意味を持つが現在までにその実態を明らかにした報告はないことから、千葉大学の三川医師が骨髄バンクを介した移植症例を対象にサクスター送付率を解析し、影響因子を検索する研究を進められている。課題名は「造血幹細胞移植におけるサクスターに関する単施設解析」である。千葉大学で移植した患者のお手紙率が上がったかどうか、そこに影響した要因はHCTCの存在であったということである。今回、学会から移植を受けた患者に対するドナーの声を聞く必要があるのではないかということで追加の協力依頼があった。協力依頼は、千葉大学で実施された骨髄バンクを介した移植において、移植を受けた患者さんの手紙を受理したドナーに対するアンケートの送付依頼及びデータ提供依頼

である。考慮すべき事項として、骨髄バンクを介した移植においては、両者の匿名性を担保するため、施設名含む個人情報を提供していないが、今回の協力要請においては、ドナーに対して患者さんが千葉大学で移植を受けたことの情報を提供することになる。今回の対応は千葉大学の三川医師からの依頼であるが、骨髄バンク事業全体にとってもお手紙交換に関するアンケートは、今後の新たなルール策定に向けた貴重な情報となるだけでなく、ドナーリクルート・ドナーリテンション等に有益な情報となると考える。そこで、バンクが新たな研究として対象となるドナー（2014年1月～2015年12月に提供に至った全ドナー）全員に対して同様の取り組みを実施したい。バンクの研究の位置づけの中から千葉大学に該当する情報を提供する。先述の千葉大学への情報提供は、骨髄バンクが実施する研究の中から該当する情報を、匿名化したものを提供することとし匿名性を担保する。なお、骨髄バンクが新たに行う当該研究および手続きについては当バンクの倫理審査で承認が得られた場合に可能とする。当法人の研究課題の課題名は「骨髄バンクにおける患者とドナーのお手紙交換プログラム」である。本研究では、患者さんからの「お手紙」がドナーの方にとってどんな効果をもたらしているのか、また提供に至るまでにドナーの方に協力くださるご家族・職場の方々にとって、どのような意味・効果があるのかを調査し、現行の「お手紙交換プログラム」の制度自体について検証する。更に、当法人における喫緊の課題とされているドナーリクルート・ドナーリテンションの観点から、「お手紙」を受理されたドナーの方々に積極的に広報活動に協力して頂けるのか、その効果はどのくらいあるのかについても調査し、それらに寄与する施策を検討する。これら2つの観点でアンケート調査をしたい。補足である。バンクがお手紙交換と呼んでいるのは患者とドナーとの手紙である。サンクスレターとは大阪市立大学にて始まった、手紙を書けない患者のために移植施設の医療スタッフが採取ドナーに対して発出するお礼状を示すが、本例における「サンクスレター」は、当法人を介し・移植完了した患者と提供ドナーの間で、移植日からの1年間で認められた2往復までのお手紙交換のことを示す。過去のお手紙交換率は小児科63%、内科57%で半数程度にとどまっている。続いて研究2を説明する。福田班の分担研究として「骨髄バンクコーディネイト改善のための要因の探索」が開始されており、この度、JMDPに対してドナーへのアンケート郵送作業等の協力依頼があった。かねてより業務執行会議で報告している通り、福田班が対象とする「コーディネイト期間の短縮」と「ドナープールの質向上」に関する事項は共にJMDPが取り組むべき課題であることから、本件についても対応する。研究課題は「骨髄バンクコーディネイト改善のための要因の探索」ということで、コーディネイト開始になったドナーにアンケートを送付する。年間約2万7千人の方がコーディネイト開始になり、その方々へのアンケート調査である。詳細についてはこれから決める。

(主な意見)

- <小寺> ドナーへのアンケート調査はバンクでないとできないのか。福田班としてできないのか。研究費の配分はなしでバンクがするのか。
- <小瀧> 研究1はこれからバンクの倫理審査に出すので、それが通ったらの話である。

**(3) WMDA 秋季会議およびNMDP 年次総会参加報告**

移植調整部牧野が資料に基づき説明した。

2017年世界骨髄バンク機構（WMDA：World Marrow Donor Association）秋季会議および全米骨髄バンク（NMDP：National Marrow Donor Program）年次総会に参加したので、主な内容を報告す

る。WMDA 会議報告である。今年認定更新が認められ認定証授与式があった。次に NMDP 年次総会報告である。NMDP の採取に関する動向と今後の活動について岡本委員長から次のような報告があった。「移植細胞ソースの多様化、患者の高齢化、急速に進む移植以外の細胞治療の臨床応用等、造血幹細胞移植を取り巻く環境は着実に変化している。一方で、多様な HLA に対応する様々な人種のドナーの確保は未だ達成されず、36%の患者には 8/8 マッチドナーが見つからず、48%の正式検策を開始した患者が実際に移植に到達しないのが現状である。このような状況に於いて、2015 年をピークとして移植件数は緩徐し着実に減少した。細胞ソースの割合から見ると HLA 不適合非血縁ドナー・臍帯血が減少し、ハプロ移植を含む血縁者ドナーと HLA 適合非血縁ドナーを用いた移植の割合が増加している。現在の NMDP/Be The Match の行動指針 Mission statement は “We save lives through cellular therapy” である。NMDP は、移植センター、採取センター、アフエレーシスセンター、ドナーリクルートセンター、臍帯血バンク等々、米国だけでなく国際的にも広い Network を持つ。この Network を最大限に活用して、血縁ドナーのコーディネーターや細胞治療を積極的に NMDP の活動に取り込もうとする姿勢が明らかである。Dr. Chell の後任として CEO に就任した Dr. Mills は PhD であり、従来の Donor Registry から次世代の Donor Registry へ組織を成長させる意気込みがここにも感じられた。Cell Therapy に関する詳細な説明を聞く時間は得られなかったが、提示された資料から得られる情報では、NMDP は Be The Match Biotherapies という子会社を 2016 年に立ち上げ、Bio-company との連携を既に開始している。具体的な連携項目は Cell sourcing、Cell therapy supply chain delivery、Clinical trial and research support (細胞療法、研究等)、そして Cell therapy outcome registry and repository (移植患者のフォローアップを含むデータ収集、分析と保存) と既存の network と関連組織 CIBMTR などを巻き込んだ、同盟を構築することが伺えた。我が国において、この体制を、JMDP を中心として構築することは不可能であるが、法制度の下に連携した組織の将来構想として検討する価値は高いと考えられた。」最後に有害事象報告についてである。WMDA の有害事象については WHO (世界保健機構) ウェブサイトに公開している。しかし今後は、WMDA のウェブサイトでの公開を検討するとのことだった。

(主な意見)

- <小寺> 印象としては NMDP もドナー、臍帯血は集まっているが移植数は減少傾向が見られるということと、そういう時代において NMDP をさらに発展させるために Cell Therapy の領域の方に入り込もうとしている。今年も対面をしたのか。
- <牧野> 今年は 2 件の対面があった。

(6) 調整医師の新規申請

谷澤ドナーコーディネーター部チームリーダーが資料に基づき説明した。

10 月 13 日～11 月 10 日の期間で新たに申請・承認された調整医師の数は 4 名である。これで現在 1200 名になる。

(7) 募金報告

大久保広報渉外部長が資料に基づき説明した。

10月の実績は448件、金額で633万2090円、累計では件数で4009件、累計の金額は6137万6172円で前年と比較すると690万円ほど上回っている。単月で見ても前年と比較して71万円ほど増えた。ドナー登録者で過去に寄付歴のある方の家族から遺産相続で100万円をいただいた。島根県の県民共済生活協同会から50万円いただいた。

以 上